

# 共に生き、共に学ぶ

埼玉県坂戸市議会議員 武井 誠

私は、公立中学校の教員をしていました。中学生や、新しく職場に迎えた若い仲間とつきあいながら、こんなことを考え、行動してきました。

基本は、「教える、授ける」ではなく「共に生き、共に学ぶ」です。日教組の教育研究活動の到達点に学びながら・・・と言ってもいいでしょう。そういう自負も、多少あります。



①見下さない。しかし迎合しない。

職場の慣習、仕事のノウハウの中には、たとえば「急に声を小さくすると、生徒の集中が増す」といった先人の知恵の蓄積というべき部分と、「お茶くみは、女性の仕事」といった明らかに間違っているが、何らかの理由で引き継がれてきた悪習が混在しています。一方、若者にも、経験不足による未熟さと、悪習をうちくたくパワーが混在しています。だから私たち自身が学習し、自分たちの価値観を持ち、残すべきものと変えるべきものを見分ける力を持つこと、若い世代に対しては、見下さないし、迎合もしない、ということが大切ではないかと考えてきました。

②「見る」・「聴く」

これは、あるカウンセラーからの受け売りです。

若者をよく「みる」。ただし、ただ見るのでも、監視するように視るのでもなく、目に手を添えて「見る」。言うことをよく「きく」。ただし、ただ聞くのでも、訊問するように訊くのでもなく、耳に十四の心を添えて「聴く」。

つまり、仲間としての信頼を前提としながら、なぜこの人が、こういう言動をするのか、その気持ち、背景について考えながらつきあう。そうすると、そこに今の社会のゆがみ、彼（彼女）なりのしんどさが見えてきて、より連帯感が持てる。

特に、生徒の反社会的、非社会的言動と向き合うときに、役に立つ考え方でした。「私ならもっとぐれている」と感じる環境の中で、必死にもがいている中学生とたくさん出会いました。

③減点法ではなく加点法で評価する。数字や目先の実績だけで評価しない。

100点を目標とするテストを繰り返すなかで作られる価値観だけに、流されたくないという思いがありました。「こんなことが、まだできない」という引き算の考え方ではなく

「これができるようになった」という足し算で評価する。また「あなたには点数には表れない、こんないいところ、悪いところがある」と評価する。また、そういう評価を意識して、若者と向き合うということです。

#### ④質問、反論、試行錯誤を歓迎する。

特に、1回目が肝心。そこで「こんなこともわからないのか、できないのか」「くだらないことを言うな」と絶対に言わない。一見くだらない質問や、失敗のなかに、次の飛躍のヒントがたくさんあったというのは、特にイベントへの取り組みや、授業展開のなかで何回も経験しました。また、失敗を恐れずにのびのびと仕事（学習活動）のできる雰囲気、職場（教室）全体にもいい影響を与えます。

このようなことを、同世代の仲間たちとも、話し合ったりしてきました。

一つ重要なのは、職場に自由があるか、ゆとりがあるかどうかということです。学校現場について言うと、年々加速度的にいそがしくなり、目標管理でしぼられ、教員はそれぞれ自分の目の前の仕事のことだけで手いっぱいになってきました。そうになると、ゆっくり若者と語りあったり、アドバイスしたりする時間がなくなり、仲間の失敗に対しても不寛容になっていきます。それが、さらに学校の雰囲気を悪くし、生徒の荒れる原因となっていくという悪循環が感じられます。

苦い反省や、思い出したくない出来事もいくつかあります。

社会のあり方への怒りが大きいほど、結果として若者に「甘く」なる傾向が、あったかもしれません。「あなたは、管理職には厳しすぎ、若者には甘すぎる」と、何人かの同世代の仲間に使われたことがあります。

また、未熟な若者や中学生は、ときとして残酷な言動を、平気で言ったりやったりします。こっちも聖人君子ではありませんから、いくら「こいつも、赤ん坊のときにはかわいかったはずだ」と思っても「我慢にも限界がある！」と、つい感情的にやりあい、落ち込んでしまうこともありました。

逆に、一人ひとりの重い悩み、不満、苦闘に共感しすぎて、私自身が心身のバランスを壊してしまうこともありました。

しかし、それでもなお、若者は希望です。エールを送りたい。だいぶ前になりますが、篠原美也子というシンガーソングライターの「誰のようでもなく」という曲に、いたく感動しました。歌詞の一部を紹介して、結びとします。

小さな花とあきらめるな 何もできないと決めつけるな

たとえどんなわずかなことも 誇りにできる力を持って  
「あんたはまだ若い」などと 卑怯な逃げ方をするな  
時代を変えていくものが あるとすれば  
それはきっと 名もない青春たち